

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 10 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381228

研究課題名(和文) オーラル・ヒストリーによる戦後の創造主義的造形教育の検証と考察

研究課題名(英文) Study of postwar creative art education by oral history

研究代表者

辻 政博(Tsuji, Masahiro)

帝京大学・教育学部・准教授

研究者番号：60711702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：『研究資料集 オーラル・ヒストリーによる戦後の創造主義的造形教育の検証と考察』の発行(研究代表者：辻 政博(帝京大学准教授)、発行所：帝京大学教育学部初等教育学科辻政博研究室、発行日：2016年12月11日)。

児童画資料展(2016年12月11日～12月20日、NPO法人市民芸術活動推進員会ギャラリーにて)と、シンポジウム開催(12月11日(日)、テーマ「児童画を通して戦後の造形教育を語ろう」、パネラー：辻政博、鈴石 弘之(CCAA理事長)、水島 尚喜(聖心女子大学教授)、穴澤秀隆(CCAA理事))。

研究成果の概要(英文)：Publication of research materials "Issuance of verification and consideration of creativeistic art education after the war by oral history" (Research leader: Masahiro Tsuji (Associate Professor, Teikyo University), Publishing office: Teikyo University Faculty of Education Department of Primary Education Research Masahiro Tsuji Room, issue date: December 11, 2016).

Children's Picture Exhibition (December 11 - December 20, 2016 at the NPO Citizen Art Activity Promotion Committee Gallery) And a symposium (Sunday, December 11th), theme "Let's talk about art education after the war through children's painting", Masahiro Tsuji, Hiroyuki Suzuishi (CCAA Chairman), Naoki Mizushima (Professor of Seishin University) Hidetaka Anazawa (CCAA Executive Director).

研究分野：造形美術教育学

 キーワード：オーラル・ヒストリー 戦後の創造主義的造形教育 創造美育運動 Transcription 人間観 教師観  
 子供観 教材観

### 1. 研究開始当初の背景

造形教育における教師の指導力は、「正統的周辺参加」(レイブ、ベンガー1991)と呼ばれるような教師の共同性の中で育まれる。その意味では、教育の実質は、その教師の存在とともにある。

戦後の「創造美育運動」をはじめとする創造主義的な優れた実践は、その時代の様々な教師とのかかわりの中で生まれた個々の教師の指導の反映でもある。

そうした個々の実践者の生きた言葉を収集することでより造形教育の実相に即した考察が得られると考えた。

現在、戦後約70年を経過し、当時の実践者の逝去や高齢化が進んでいた。戦後の当初の創造主義的造形教育の記憶と資料が、風化しつつあった。

このような動機から、本研究では、オーラル・ヒストリーの手法で、存命者から当時の創造主義的造形教育を聞き取り、情報化し保存することが、急務であると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後当初に始まった「創造美育運動」をはじめとする当時の造形教育の推進者、指導者から聞き取り調査、及び資料の収集を行い、現在実施されている「新学習指導要領」に連なる創造主義的な造形教育の検証を行なうことである。

戦後約70年が経過し、当時の指導者たちの多くが逝去し、高齢化しつつある状態である。

本研究によって、造形教育の貴重な歴史的証言、資料を得ることができると考えた。また、ここで用いられる「オーラル・ヒストリー」による研究方法は、造形教育においてこれまで、ほとんど用いられておらず、造形教育の研究方法として、新たな可能性を開拓できると考えた。

### 3. 研究の方法

創造美育運動をはじめとする戦後当初の造形教育の実践者、関係者の中から、インタビューの対象者を選出し、インタビュー実施の内容や方法を計画した。

インタビューの方法は、ボイスレコーダー、ビデオ、写真等で記録し、それらを基に言語化した。言語化に当たっては、話し言葉の特性が生きるような方法を検討した。

また、インタビュー訪問に際して現地を訪れるので、作品等の収集による映像化、情報化にも留意し、多角的な視点から考察できるようにした。

#### (1) 平成26年度の研究計画・方法

1年次の訪問先は、野々目桂三氏(創造美育運動実践者)と島崎清海氏(元「創造美育協会」事務局長。)と、以下の5名からインタビューを行う。(野々目氏、高齢化に伴う体調不良のため、島崎氏は平成27年2月ご

逝去のため、インタビューを断念した)。

創造美育運動の初発の当事者から、現在の造形教育への流れを射程に、インタビューを実施する。創造主義的な造形教育の時間的な推移と推移が俯瞰できると考えた。

①寒河江文雄氏(山形県。「想画保存会」代表。元「創造美育協会」青年会員)

②塩川寿平氏(野中保育園)

③鈴木弘之氏(元東京都図画工作研究会会長、元全国造形教育連盟委員長)

④岩崎清氏(元「こどもの城」造形事業部)

⑤西野範夫氏(元文部科学省視学官)

#### (2) 平成27年度の研究計画・方法

2年次は、創造美育運動の系譜を辿って、以下の熊本、福井方面を取材する。創造美育運動は、全国的に展開し、熊本と福井は、最も運動の盛んな地域であった。ここでは、創造主義的造形教育の空間的な広がりを俯瞰できると考えた。

また、創造美育運動創設当初からの活動家である高森俊氏のインタビューを計画した。さらに、創造美育運動は、北川民次の教育活動に大きな影響を受けており、現在、保存されている民治のアトリエを訪問した。

①北川民次アトリエ(尾張瀬戸)の訪問と民治指導の壁画の視察。

②高森俊氏、訪問インタビュー(創造美育協会。神奈川県川崎市、高森氏自宅)

③熊本方面の訪問。

山田星史氏と「子ども美術文化研究会」のメンバーのインタビューと施設訪問(光輪保育園、かもと乳児保育園、緑川保育園、大矢野あゆみ保育園、もぐし保育園)。

④福井県方面の訪問。

・国定秀行氏インタビュー(木水育夫顕彰会)

・木水創氏インタビュー(木水育夫氏長男)

・阿部麻莉江子氏インタビュー(福井創造美育運動実践者)

・朝倉俊介氏(創造美育運動研究者)

・長谷光城氏インタビュー(元福井県教育審議官)のインタビューと木水育夫指導の児童画等の関連施設の視察。

#### (3) 平成28年度の研究計画・方法

3年次は、以下の点から研究のまとめを行った。

①その他の創造主義的造形教育を実践する施設や関係者の調査。該当者、該当施設があれば調査を実施する。

②これまで採集してきたインタビューを基にそれらを総合した視点から「課題5:オーラル・ヒストリーの手法による創造主義的造形教育の理念と教育方法の構造化と明確化」について考察を深める。

③これまで行なったインタビュー・データを整理・分類し、5つの課題から創造主義的造形教育の特徴を明らかにする。創造主義的造形教育の特徴を「題材設定」と「授業方法」

の視点から焦点化して考察し、その理念と教育方法を分析する。

④研究成果をまとめ報告書を作成する。

⑤児童画等の資料を収集し、分類整理し、展覧会を行う。

⑥シンポジウムを開催し、研究成果を協議する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 生々しい声

目の前にいる話者が放つ言葉は、生々しい。その身振りや表情と相まって話される言葉も、聞き手にとっては、独特の現実性をもつものである。だから、その話者を丸ごと受け止めることになる。そして、その言い淀みさえも、そこでは、肯定的な現実である。確かに、受け止める側は、そこにリアリティを受けとることになる。

けれども、テープに記録し、それを「書き言葉」に置き換えるや否や、そこで感じていたリアリティが霧散する。話し言葉は、書き言葉のように、整序されたものではなく、そこに居合わせた文脈をもたない者には、意味不明の言葉の羅列となる。テープを書き起こしながら、その解離を強く感じた。

本研究では、話し言葉を書き言葉に定着しようとしてみた。そこでは「書き換え

(Transcription)」を主な回路とした作業をおこなうことになる。けれどもその作業は行うごとに偏差を生み、終わることのない作業となった。

##### (2) 貴重な証言

戦後の造形教育をつくりあげてきた方々の協力を得て、その声を拾い、それを言葉に記録したものである。残念ながら、戦後の造形教育に関わった人々は、すでに多くが他界し、その声を聞くことができなくなっている。

計画当初、予定していた島崎清海氏は、インタビュー直前に病床に伏し他界された。野々目桂三氏も体調がすぐれずインタビューを実現できなかった。

けれども、寒河江文雄氏（山形県「想画保存会」代表。元「創造美育協会」学生会員）、塩川寿平氏（野中保育園）、鈴木弘之氏（元東京都図画工作研究会会長）、岩崎清氏（元「こどもの城」造形事業部）、西野範夫氏（元文部科学省視学官）、高森俊氏（創造美育協会）、山田星史氏と「子ども美術文化研究会」（光輪保育園、かもと乳児保育園、緑川保育園、大矢野あゆみ保育園、もぐし保育園）、国定秀行氏（木水育男顕彰会）、木水創氏（木水育男氏長男）、阿部麻莉江子氏（福井創造美育運動実践者）、朝倉俊介氏（木水育男研究者）、長谷光城氏（元福井県教育庁教育審議監）らのインタビューが実現できた。

本冊子では、①戦後当初の創造美育運動の様子、②創造美育運動の各地における展開、③創造主義的な造形教育の公教育における展開を、時代を追いながら俯瞰しようとい観

点で、7つのインタビューに絞り掲載した。掲載しなかった他のインタビューも今後、研究資料として活用の方策を考えていきたい。ご協力いただいた皆様には、改めて感謝したい。

また、島崎清海氏や高森俊氏の指導作品や児童画コレクションに加え、すでに廃棄されたと考えられていた北川民次の指導作品を発見したことは、この研究の特筆すべき成果であった。

##### (3) 経験された歴史

戦後の造形教育の約70年の歴史は、周知のように「創造美育運動」にはじまる。その隆盛と、その後の分派（「新しい絵の会」「造形教育センター」と運動の衰退、そして、民間美術教育運動の衰退と入れ変わるように、1980年前後に立ち上がってきた「子どもの論理」を掲げた文部省の「新しい学力観」、東京都の公立小学校を基盤とした図画工作研究の勃興。また公教育の教育課程編成における「教科存立の危機」などを大きな流れとしてあげることができる。

戦後の造形教育の前期を牽引したのは久保貞次郎が創設した創造美育協会の運動であり、後期を牽引したのは文部省の西野範夫氏である。

島崎清海氏は、長らく創美の実務を預かっていた人物であり、組織内の人間関係や運営の機微が推察できるインタビューとなった。高森俊氏は、創美の第2回大会から参加する運動の体現者である。その話からは、「抑圧からの開放」など、創美の活動の理念が浮かび上がった。また寒河江氏のインタビューからは、創造美育に関わる参加者の民主主義的で自由闊達な活動の様子が垣間見られた。映画監督の羽仁進や瑛九、池田満寿夫などの著名な芸術家も参加しており、創造美育の運動は、社会を巻き込むような運動であった。そこには、戦後の瓦礫の中で、自由と民主主義、アートをつくりあげようとする造形教育関係者の熱意のようなものが伝わってくる。

創美の活動は、全国に伝搬していった。塩川寿平氏や長谷光城氏のインタビューでは、地方における創美の運動の受容と展開の様子が見受けられた。そこでは言わば創美の第一世代の成果を引き継ぎながら、独自の教育を展開していることがうかがえた。生活と芸術が未分化で総合的な幼児教育、保育の領域では、その水脈が未だ息づいている。

また、福井県では、戦前から前衛的な芸術文化運動が醸成されていて、戦後初頭の新しい造形教育と呼応して活動が進展していった。そこには、中心と周縁のダイナミックな関係があり、原動力となっていたこともうかがえた。

やがて、教育制度の整備に伴って、民間美術教育運動が衰退していく。そして系統主義的な教師主導の教育を経て、児童を中心とした経験主義的な教育が、1980年前後を境に公

教育の中に再登場する。西野範夫氏と鈴石弘之氏のインタビューからは、政策立案と教育現場の立場から、造形を媒介とした教育の理想を実現しようとする努力と意気込み、そして挫折が、痛みを伴うような感覚で語られている。80年前後の転換点では「造形的遊び」や「ワークショップ」という言葉が、重要なキーワードとして浮かび上がってきている。それは、単に造形教育の一方法論ではなく、子どもの学びを中心に据えた探求性を志向する教育の理想を背後に抱え込んでいる言葉であった。

21世紀に入った現在「知識基盤社会」「格差社会」「多文化共生」等々の教育課題が浮上し、教育自体の変革が求められている。こうした中で「造形教育は何をなし得るか」が以降の課題となる。

#### (4) 終わりに

ここで行われたインタビューは、歴史を動かしてきた当事者たちによる経験された歴史である。歴史は自動的に点滅するわけではなく、その時代に埋め込まれながら点滅に関わる人々がそこに存在する。そこには、人々の情熱や努力が存在するのである。歴史が動いていく原動力とは、人々のうちに潜む無意識の欲動によると考えれば、オーラル・ヒストリーは、そうした歴史に参加してきた人々の光彩や機微をすくい上げる優れた方法である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

辻政博著「オーラル・ヒストリーによる戦後の創造主義的造形教育の検証と考察」〔フロントライン研究〕『初等教育資料7月号』(文部科学省著、東洋館出版社、平成29年6月25日発行予定)。

〔学会発表〕(計1件)

発表者：辻政博。美術科教育学会(会場：上越教育大学。新潟県上越市山屋敷町1番地。2015年3月28日～29日)。

〔図書〕(計1件)

『研究資料集 オーラル・ヒストリーによる戦後の創造主義的造形教育の検証と考察』(研究代表者：辻政博、発行：帝京大学教育学部辻政博研究室、2016年)。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：  
○取得状況(計0件)  
名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
辻政博ブログ「ひつじcafé」にて活動を断続的に紹介

(<http://hitsujicafe.blog.fc2.com>)。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻政博(MASAHIRO, Tsuji)  
帝京大学・教育学部初等教育学科・准教授  
研究者番号：60711702

(2) 研究分担者

なし( )  
研究者番号：

(3) 連携研究者

水島尚喜(MIZUSHIMA, Naoki)  
聖心女子大学・文学部教育学科・教授  
研究者番号：20219629

(4) 研究協力者

鈴石弘之(SUZUIISHI, Hiroyuki)  
NPO法人市民の芸術活動推進委員会・理事長  
穴澤秀隆(ANAZAWA, Hidetaka)  
NPO法人市民の芸術活動推進委員会・理事